

もうすぐ死ぬ悪女に
転生してしまった

～生き残るために清楚系美女を
演じていたら聖女に選ばれました～

来須みかん

Mikan Kurusu

✧ カルヴァン ✧

ハロルドの護衛を
務める騎士。

✧ ハロルド ✧

アニスヴィヤ王国の王子。
腹黒く、目的のためなら
手段を選ばない。

✧ クリフ ✧

平民出身だが、
天才と名高い
魔導士。

✧ ルーフォス ✧

メアリーの異母兄。
潔癖な性格で、
庶子の妹を軽蔑している。

✧ エイベル ✧

フランティード侯爵令息。
天真爛漫だが
気まぐれなところがある。

✧ パティ ✧

メアリーと同じ聖女候補で、
乙女ゲーム
『聖なる乙女の祈り』の主人公。

✧ メアリー ✧

ノーヴァン伯爵令嬢。
聖女候補として育てられながら、
庶子だからと継母に虐げられてきた。
前世の記憶を思い出し、
自分の運命を変えようと奮闘する。

登場人物紹介

目次

もうすぐ死ぬ悪女に転生してしまった

〜生き残るために清楚系美女を演じていたら
聖女に選ばれました〜

書き下ろし番外編

それぞれの幸福な結末

もうすぐ死ぬ悪女に転生してしまった

く生き残るために清楚系美女を演じていたら
聖女に選ばれましたく

第一章 悪女メアリーは生き残りたい

「お前には失望したよ。メアリー」

「お父様……」

大きくふりかぶられた父の右手が、メアリーの左頬を打った。

冷たい瞳を向けられ、自分は父の期待に応えられなかったのだという深い絶望に襲われる。

（もう、死んでしまいたい……）

そう思った途端、メアリーの脳裏に見覚えのない映像が広がった。

そこは見たこともない世界で、ニコニコと微笑む女性の姿がある。

彼女はメアリーとまったく違う姿なのに、なぜかハッキリとこう思った。

（あれって私……だよな？）

その楽しそうな『私』は、時間とお金をつぎこんで『聖なる乙女の祈り』という乙女

ゲームを熱心にプレイしている。

（そうそう、イラストが綺麗で、声優も豪華で、ストーリーも最高で、すごくハマってて……）

『私』は携帯ゲーム機を握りしめながら「はあ」とため息をつくとき、ベッドの上をゴロゴロと転がった。

「私が死んだら、絶対このゲームの世界に転生したい！ モブでもなんでもいいです！

お願い神様！」

不思議な映像はそこで途切れ、メアリーは我に返る。

父の姿はすでになく、メアリーは自分の部屋に一人取り残されていた。

（なに、今の……あれ、転生したいって思ってたのは『私』で……これって、夢……？）

父に打たれた頬が熱を持ち、これが夢ではないと教えてくれる。見慣れたはずの部屋を見渡すと、そこは中世ヨーロッパ風の豪華なインテリアで埋めつくされていた。

（えーと、待って待って。もしかして、本当に転生？ これ、私の願いが叶っちゃってる!?)

『前世の自分がなにをしていたのか』とか、『どうして死んでしまったのか』などの詳しいことは思い出せない。ただ、『聖なる乙女の祈り』のゲーム内容だけは鮮明に覚え

ている。

「やったー！ やったー！」

メアリーはびよんぴょんと飛びはね、部屋にあった姿見で己の姿を確認する。

「うっわ、誰これ!? すっごい美人！ モブでもいいですなんて言ったのに、こんな美人にしてくれるなんて！」

メアリーは「神様、ありがとー！」と叫ぶと豪華なベッドにダイブした。

「あー、ダメダメ。今の私はメアリーっていう貴族の令嬢なんだからね。はしたない行動は慎まないと……」

前世の記憶とメアリーとしてここまで生きてきた記憶。その両方があるので、慣れるまで少し違和感があるかもしれない。

メアリーはベッドから起き上がると、今の状況を声に出して確認しはじめた。

「えっと、私はアニスヴィヤ王国、ノーヴァン伯爵家のメアリーね。でもあれだわ、正妻の娘じゃなくて、伯爵がメイドに手を出して産ませた子ども。だから、庶子ってやつね」

そのせいで伯爵夫人にこれでもかとイジメられ、異母兄には軽蔑され、唯一メアリーが聖女になることを期待して目をかけてくれた父にもたつた今、見捨てられたところだ。

「あーこりゃ、メアリーさん、人生に絶望するわ」

ただ、前世の記憶を思い出した今は、メアリーであってメアリーでないので、この世界の家族のことはもうどうでも良くなっていた。

メアリーはもう一度鏡を見る。鏡の中の女性は白くきめ細かい肌に、輝く黄金色の美しい髪。そして、どこか影がある青い瞳が色っぽい。胸は豊かで腰が細く、手足もモデルのようにスラッとしていた。

「うーわ、私好みの儂げ美女だわあ。でも、ゲームにこんなキャラいたかな？ メアリー……メアリー……？」

そういえば、ゲームの主人公を陥れようとする悪女がメアリーという名前だった。

「え？ 嘘。メアリーって、悪女のメアリー・ノーヴァン？」

『聖なる乙女の祈り』は、主人公であるパティが攻略対象の聖騎士たちと恋をしながら聖女を目指すゲーム。

そこにライバルとして登場するメアリーはパティと同じ聖女候補で、ありとあらゆる陰湿な嫌がらせをくり返し、最終的にパティを殺害しようとする悪女だ。どれだけ嫌がらせをされようと、いつも明るく朗らかなパティと違い、ゲームの中のメアリーはキツイ顔立ちの傲慢で暴力的な女性だった。

けれど鏡の中のメアリーは、どちらかというと大人しそうな印象だ。

（そういえば、私、庶子だからってバカにされないようにわざと濃いメイクしてたっけ……。今思うと似合ってたし、もったいないことしたわね）

ちなみにゲームでのメアリーは、パティがどのルートへ進もうと必ず死んでしまう。タイミングと死に方が違うだけで、死の結末は免れない。

そして、今。聖女となるべく神殿でパティと競い合っていたはずのメアリーは、ゲームのストーリーと同様に、パティへの殺害未遂容疑をかけられ、家に謹慎させられている。明日になればパティに心酔した聖騎士たちがメアリーを拘束しに来るだろう。多くのルートではそのまま断罪されてジ・エンドだ。断頭台へのカウントダウンはすでに始まっている。

「あ、れ？　もしかして、私……もう手遅れ？　こういうのって、普通なら子ども時代に前世の記憶を思い出して『これから悪女を回避するために頑張るわ』って話になるんじゃないの!？」

それなのに、メアリーには散々パティをイジメた記憶があった。メアリー自身、子どもの頃から伯爵夫人にイジメられてきたのでイジメ方には事欠かず、ありとあらゆる方法でパティをイジメてきたのだ。

「でも私、殺そうとまではしてないのに……」

今までのメアリーの記憶を思い出しても、パティを殺害しようと思ったことはなかった。

メアリーの目的はあくまで自分が聖女になることだ。

（メアリーは聖女になって、一度でいいからお父さんに笑顔で褒めてもらいたかったんだよね……。こうして考えてみると、パティをイジメたことは、本当に悪いけど、メアリーも結構可哀想な子だわ。しかも、身に覚えのない罪で裁かれそうになっているということは、誰かがメアリーを殺そうとしているってことじゃない……？）

大好きなゲームの世界を楽しむどころか、命を狙われている。

「とりあえず、生き残ろう……。まず、それだ」

メアリーはなんとしてでもこの世界で生き残る覚悟を決めた。

そうと決めたなら、聖騎士たちに気に入られるように立ち回るしかない。メアリーがたどる結末のほとんどは、聖騎士に殺されるものだからだ。

そのためにメアリーは、まず外見を整えることにした。クローゼットを開けると、そこには赤や黒の派手なドレスが並んでいる。

（いやいや、こんないかにも『悪女です！』みたいな服を着てたら私の印象最悪だよ！）

明日メアリーを拘束しに来る聖騎士たちは、皆、ゲームの攻略対象者だ。彼らが恋に落ちるのは清楚で可愛らしい主人公のパティなので、正反対のメアリーに好印象を抱くはずがない。

メアリーは泣きたい気分でクロゼットをあさる。その結果、飾り気のない白のワンピースを見つけた。

（あ、これ、聖女選抜の時に無理やり着せられたワンピース）

あの頃のメアリーは「高貴な私にふさわしくない！」とキレて暴れたが、今見ると袖や裾のレースが上品でとても可愛らしい。

（これを着よう！）

いそいそと着替えると、今度はメイクに取りかかる。

（濃いメイクはダメ。聖騎士たちは皆、パティみたいな清楚系が好きだからね）

聖騎士たちに命乞いをするにしても、見るからに性格の悪そうな女が泣きつくより、清楚で可憐な女が泣いたほうが印象はいいはず。メアリーは大人しそうな顔を隠さない程度に薄くメイクをする。

メイクや着替えを手伝ってくれるメイドなんていない。この家には、メアリーの味方はいなかった。もし、少しでもメアリーをかばおうものなら、伯爵夫人の怒りを買って

すぐに辞めさせられてしまうからだ。

鏡に映った姿を見て、メアリーは満足そうにうなずいた。

「なかなかの清楚系美女。影のある目元が薄幸そうでいいわ。あと、これね、背中の傷」

さっき着替える時に見えたメアリーの背中には、伯爵夫人に叩かれたり物を投げつけられたりしてできたアザや傷が残っていた。

「傷は聖なる力で治せるけど、私、身体が固くて背中まで手が届かなかったのよね……」メアリーは子どもの頃から聖なる力が強く、傷を負っても自分で治すことができた。けれど治療するには傷に触れる必要があり、手が届かない場所はどうしようもない。だからメアリーは背中が見えるドレスを決して着なかった。

「もう最悪の場合、聖騎士ともに、この背中の傷を見せて『ずっと虐待されてました』って泣きついてやるわ」

プライドが高かった以前のメアリーは、夫人から虐待を受けていることを必死に隠していたが、今はもう守るプライドもない。

「使えるものはなんでも使って生き延びてやる！」

鼻息荒く立ち上がると、くらりとめまいがした。お腹がキュルキュルと切なそうな音

を立てる。

「あー……お腹すいた」

この部屋に閉じこめられてから、まともに食事をもらえていない。

「ダメだわ。このままだと命乞いする前に、空腹でぶっ倒れるかも……」

仕方なくメアリーは自室の扉をそつと開けた。メイドの姿はないが、その代わりに、こちらをにらみつける異母兄ルーフォスの姿があった。ルーフォスは聖騎士がまとう藍色の騎士服を着て、腰に剣を帯びている。

（そうそう、ルーフォスも聖なる力が強いから、聖騎士の一人に選ばれているのよね……）

ルーフォス・ノーヴァンは、父がメイドに産ませた庶子のメアリーを軽蔑していた。面と向かって「汚らわしい」と言われたこともある。

（きつと、私が逃げないように監視しているのね）

殺害未遂の容疑者にもかかわらずメアリーが今こうして伯爵家の屋敷にいるのは、このルーフォスの存在が大きい。潔癖にも近いルーフォスなら、たとえ身内でも犯罪者を逃がすことはないという判断で、メアリーは牢屋ではなく家での謹慎——という名の軟禁で済まされた。

そして、このルーフォスは、乙女ゲーム『聖なる乙女の祈り』の攻略対象者の一人だ。

（あーあ。ゲームでのルーフォス・ノーヴァンは、大好きだったのになあ）

メアリーと同じ金髪碧眼のルーフォスは、鋭い印象の美青年だ。

ゲームでは毒親の伯爵夫人と、性悪の異母妹メアリーによって深く傷つけられ、女性を嫌悪するキャラだった。そんなルーフォスの凍りついた心を、ゲーム主人公のパティが溶かし、癒していく、というのが彼のルートシナリオだ。何度冷たくあしらわれても、優しく微笑みかけてくれるパティに少しずつ少しずつ心を開いていく……そんなルーフォスに、ゲームではとてとときめいていたのに。

メアリーは改めて目の前のルーフォスを見る。確かにゲームと同じように美しい顔をしているが、少しもときめくことはない。

（だってさ、コイツ、メアリー視点だと、腹違いとはいえ虐待を受けている妹を助けもしないどころか「汚らわしい」とか言ってくる最低野郎だよ？ なに自分だけ被害者ぶってパティに癒してもらってんの？ 一発ぶん殴ってやりたいわ）

そうは思っても、彼も聖騎士なのでメアリーが生き残るには媚びを売るしかない。

「おに……」

お兄様と呼ぼうとすると、ルーフォスの顔が汚いものを見るように歪んだ。

(あ、そうそう。コイツ、私にお兄様って呼ばれるの嫌がっていたっけ)
それでもなんとか家族として認められたかったメアリーは、しつこく「お兄様」と呼んでさらに嫌われていた。

メアリーは、ワンピースの裾を持つと、いつもより深くルーフォスに頭を下げた。

「ルーフォス様、この度は大変申し訳ございません」

ルーフォスはさらに顔を歪めて「謝って済む問題とも思っているのか?」と吐き捨てるように冷たく言い放つ。

「いえ、ルーフォス様のおっしゃる通り、汚らしい私などが伯爵家に足を踏み入れたのが間違っておりまして」

頭を下げて、ルーフォスに顔が見えないのをいいことに肩を震わせ、泣いているふりをする。

そんな妹を鼻で笑いながらルーフォスが放った言葉がこれだ。

「ようやく自分の立場を理解したか」

(うーわ、ないわあ。お前にパティはもったいない)

メアリーが知る限り、パティはゲーム通りの美しく心優しい女性だった。メアリーにいくらひどいことをされても、彼女が怒りを露わにすることはなかった。ただ、静かに

悲しそうな瞳をこちらに向けるだけ。

(ああつ、本当にごめんね。パティ)

今すぐ彼女の足にすがりついて泣きながら今までのことを謝罪したい。そう思うと本当に涙がにじんできた。

そうしているうちに、また空腹でめまいを感じる。

(う、お腹がすきすぎて気分が悪い)

くらりと身体がかたむくと、ルーフォスはすばやく剣を引き抜きメアリーに突きつけた。

「なんのつもりだ?」

メアリーは床に両膝を突いてルーフォスを見上げた。

威嚇するように向けられたルーフォスの鋭い刃がメアリーの頬に当たり、薄く肌を傷つける。痛くはない。聖なる力のおかげで、これくらいの傷で痛みを感じることはない。

「申し訳、ありません。空腹でめまいが……」

ルーフォスは鼻で笑うと「浅ましい」とつぶやき、その場を立ち去った。去り行く背中をにらみつけ、メアリーはたった今できた頬の傷にそっと触れた。

(いいものをもたらったわ)

今までのメアリーなら、すぐに傷を消していたが、今はこの傷すら生き残るための武器になる。

（聖騎士ルーフォスが女の頬を傷つけて平然としている男だと知ったら、パティや他の聖騎士たちはどんな顔をするかしらねえ？）

心優しいパティはそれでもルーフォスを受け入れるのだろうか？

（それに、庶子なのは、実は私だけじゃないのよねえ。お兄様はその方にも『汚らわしい』って言うのかしら？）

この乙女ゲームをプレイし尽くした記憶を持つ今のメアリーだからこそ知る秘密がたくさんある。それを使えばルーフォスに復讐することもできそうだ。

メアリーは悪女の名にふさわしい、不敵な笑みを浮かべた。

（まあ、それより今は、なにか食べないとね）

メアリーは立ち去ったルーフォスが戻ってこないことを確認してから、厨房に向かった。この屋敷は、貴族と下働きで居住場所を完全に分けている。二ヶ所は細い通路で繋がっていて、騒がしい厨房は下働きの居住区にあった。

（今までの私だったら、暴れてメイドたちに『食事を運びなさい』って叫んでいたけど、そんなムダなことはもうしないわ）



食事が運ばれてこないなら、直接厨房に行って食料を確保すればいい。途中で何人かのメイドとすれ違ったが、皆、不思議そうな顔をしていた。もしかすると、今までのメアリーと服装やメイクが違いすぎてメアリーだと気がついていないのかもしれない。メアリーが厨房に顔を出すと、コックと三人のメイドたちが戸惑ったように声をかけてきた。

「なにかご用でしょうか？」

メアリーは人差し指を立てて「静かに」とささやいた。そして、厨房を物色しはじめる。

「あ、あの……？」

戸惑うコックに「ネズミが入ったと思って見逃して」と伝えると、彼は「え？　メ、メアリー様？」と今頃気がついたように驚いて声を上げる。

「あの、メアリー様……」

コックはなにかを言いたそうに自分の手を何度もさすっている。

「わかっているわ。伯爵か伯爵夫人に、私に食事を出さないように言われているのでしょうか？　でもお腹がすいたの。私は、明日にはいなくなるからお願ひ、見逃して」

懇願こんがんするように見つめると、コックの頬が赤く染まる。

（どうだ、薄幸美女の願ひの威力は!）

コックとメイドたちは顔を見合わせると、なにも言わずにパンやらクッキーを渡してくれた。

（こんな簡単に、人が思い通りに動くなんて……）

これは今のメアリーが庇護欲をそそる風貌をしていることだけではなく、厨房で働く人たちが、以前のメアリーとあまり顔を合わせていなかったのも良かったのかもしれない。

「あ、ありがとう」

少し感動してしまい礼を言くと、メイドの中で一番年が若そうな少女が顔をしかめながら叫んだ。

「やっぱりこんなのおかしいですよ！　お嬢様、これも食べてください！」

少女が作りたてのスープをお皿に注ぐうとして、年配のメイドが慌てて止める。

「やめな、ラナ！　奥様に鞭むちで打たれたいのかい!」

ラナと呼ばれた少女は泣きそうな顔で唇を噛みしめる。メアリーは彼女にそっと微笑みかけた。

「これだけあれば大丈夫よ。気持ちだけいただいておくわ。ありがとう」

これ以上厨房にいと、ここにいる人たちに迷惑をかけてしまう。
メアリーはパンとクッキーを胸に抱えると、そっとその場を後にした。幸いなことに
帰りは誰にも会うことなく、自分の部屋まで無事に帰ることができた。

部屋の中でパンをかじり、飢えを満たして、水を飲む。

（この世界のいいところは、建物の造りが中世ヨーロッパ風なだけで、上下水道が完備
されて衛生的なところよね）

電気はないが、その代わりに魔法の力でなんとかなっているらしい。『ここらへんの
設定がふわっとしているのも、乙女ゲームらしいわね』とメアリーは納得することに
した。

そのふわっとした設定のおかげでメアリーの部屋には洗面台と風呂がついている。な
ので、水は飲み放題だ。

窓の外を見ると、もう日が暮れはじめていた。

（食べ終わったら、お風呂に入ろうと。髪も洗って綺麗しておかないと）

聖騎士たちに命乞いをする清楚系美女は、もちろん清潔なほうがいいに決まっている。
「できることは全部しておかないとね」

そうつぶやくと、メアリーは明日が怖いような楽しみなような、不思議な気分にな

なった。

次の日の朝。メアリーは太陽が昇ると同時に起きて、念入りに身支度を整えた。昨日
練習した薄めのメイクを施し、昨日着ていた白いワンピースをもう一度着る。

（できるなら洗濯しておきたかったけど、それは仕方ないわね）

長い金髪を丁寧にとかすと、サラサラのストレートになった。金糸のように美しい髪
が、朝日を浴びてキラキラと輝いている。

（いつも派手に巻いていたけど、こっちのほうがいいわね）

鏡の前でくると回ると、自分で自分の姿にうっとりしてしまう。

（はあ。私、イケメンももちろん好きだけど、儂げな美少女や美女のキャラクターも大
好きなのよね……。我ながら最高の出来だわ）

しばらくすると、外が騒がしくなった。窓から様子を窺うと、どうやら聖騎士たち
がメアリーを拘束しに来たらしい。

（とうとう来たわね……）

メアリーは何度も深呼吸しながら、祈るように両手を握りしめた。これから起こること
を考えると、どうしても身体が小刻みに震えてしまう。扉の外で複数の足音が聞こえ

た。ノックもなく勢いよく扉が開く。

「メアリー・ノーヴァン。聖女候補パティ嬢への殺害未遂容疑でお前を連行する」
 そう冷たい声で言い放った赤い髪の男を見て、メアリーは『ついてる!』と内心歓喜した。

赤い髪の男——聖騎士エイベル・フランティードは、侯爵家の令息で、メアリーと同じ庶子だった。もちろん、このことは厳重に隠されているが、ゲーム内ではその事実を巡って事件が起こり、彼と主人公のパティが協力して解決することになる。

ちなみに、エイベルは聖騎士の中では小柄で、童顔とでもいうのか、可愛らしい顔をしている。ゲーム内では、猫のように気まぐれな行動を取り、主人公のパティに弟のような愛らしさで懐いてくる。もちろん、乙女ゲーム『聖なる乙女の祈り』の攻略対象者の一人だ。

(庶子のエイベルなら、同じ庶子のメアリーに同情してくれるかも!?)

少しの期待を込めてエイベルを見ると、エイベルはなぜか綺麗な緑色の瞳を大きく見開いていた。そして、助けを求めるようにルーフォスを見る。

「えっと、メアリーは？」

ルーフォスは無表情であごをしゃくった。

「そこにいるだろう」

「え？」

戸惑うエイベルに、メアリーは静かに頭を下げた。エイベルは「違う違う!」と首をふる。

「ええ!? ぜんぜん違うって! メアリーってなんかこう、毒々しいというか! こんな美人じゃなかったじゃん!」

(ハッキリ言うわね……。でも今は美人って認めてるってことよね)

エイベルは誰に対してもこういうあけすけな物言いをするので、以前のメアリーはエイベルのことが大嫌いだっただ。かつて、エイベルはメアリーに「お前、性格悪いな」と面と向かって言ってきたのだ。

(まあ、私も否定はできない性格の悪さだったけどさ)

エイベルは未だに信じられないように「替え玉か?」とか「魔法か?」と叫んでいる。そんなエイベルを無視して、ルーフォスはメアリーをにらみつける。

「大人しくついてこい。これ以上、恥を晒すな」

メアリーがヒステリーを起こし暴れるとも思っているのか、ルーフォスの手は腰の剣に触れていた。

「はい、ルーフォス様」

わざと他人行儀に頭を下げてルーフォスの後に続く。そんなメアリーの後を、エイベルが納得できないという様子でついてくる。

（私を拘束しに来た聖騎士は二人だけなのかしら？）

ゲームはパティの視点で進むので、メアリーはこのシーンの詳細を知らない。ただし、神殿で聖騎士とパティの前に引きずり出されるメアリーの一枚絵があったので、これから神殿に連れていかれて、断罪イベントが起こることは確実だ。

ルーフォスは馬車の前で立ち止まると「乗れ」と短く命令した。メアリーが大人しく従い、御者が扉を閉めようとするのをエイベルが止める。

「待つて待つて、僕も乗るから！」

予想外のことに驚いていると、本当に馬車に乗りこんできたエイベルは、メアリーを上から下まで眺めた後に「本当に、君が、あのメアリーか？」といぶかしげに眉をひそめた。

馬車はメアリーとエイベルを乗せてゆっくりと動き出す。

メアリーの向かい側の席に座ったエイベルは、腕を組んで不思議そうにしている。

「うーん、どう見ても別人だ。でも、ルーフォスならたとえ妹でも、容疑者を逃がすと

は思えないし……」

真剣に悩むエイベルを見て、メアリーは『これはチャンスかもしれない』と思った。

（せっかくエイベルと二人きりで話せるんだから、思いっきり可哀想な子アピールをしたらいんじゃない!?）

そう思いついた途端に、メアリーはおびえるように胸の前で両手を抱えた。そして、できる限りか細い声を出す。

「私は本当にメアリーです。それに、ルーフォス様の妹ではありませんので……」

「は？ どういうこと？」

（よし、食いついてきたー！）

メアリーは悲しそうに見えるよう目を伏せた。

「私は……その、汚らしい庶子で、高貴なルーフォス様の妹ではありません。今まで偽っていて申し訳ありませんでした」

返事がないので、チラッと視線を向けると、エイベルは目に見えて顔がこわばっていた。

「汚らしい、庶子？」

その声には、明らかに怒りが含まれている。

(そりやそうだよ。自分も庶子だもん)

メアリーは、ここは演技力の見せどころだと思った。ちなみに演技なんて今まで習ったこともないが、やらないと死ぬところまで追い詰められている今ならなんでもできる。というか、もうやるしかない。

「も、申し訳ありません！ わ、私ごときが余計な発言を！」

馬車の窓に顔を寄せ、小刻みに震えながら「ぶ、ぶたないで……」と懇願する。

(どうだ、薄幸美女のおびえる姿は!?)

演技だとバレないように必死に顔を隠してうつむいていると、エイベルが強く自分の両手を握りしめているのが見えた。

「……ぶたれてたの？ 庶子だから？」

「い、いえ！ 違います！」

必死に首をふると、エイベルはなにかに気がついたようだ。

「その頬の傷は？」

(きた——!!)

メアリーはそつと馬車の外を見る。そこには白馬にまたがるルーフォスの姿があった。慌てて視線をエイベルに戻し「か、階段から落ちました」と、わざとバレバレな嘘を

つく。

「階段？ ふざけるな！ これは切り傷だ！ それも剣のような鋭い刃物で……」

そこまで言ってエイベルは黙った。そして、馬車の外にいるルーフォスに視線を送る。

「……まさか、ルーフォスに？」

「ち、違います！ これは、私が悪いから！ 私が汚らわしいから！」

エイベルはため息をつくど、赤い髪をぐしゃぐしゃとかき乱した。

「……ちよつと待って。僕は容疑者を拘束して、事件の真相を聞きに来たんだ。どうしてこんな話になってるんだ？」

冷静になろうとしているエイベルに、メアリーは「わ、私じゃありません……」とささやいた。

「は？」

「す、すみません！」

精一杯おびえる演技をすると、エイベルが「ごめん、怒ってないから！」と慌てた素振りを見せた。その様子に、メアリーは思う。

(いや、ほんと外見って大事よね……)

以前の、キツイメイクに毒々しい色合いのドレス、派手な巻き髪で『どこからどう見

ても悪女です!』みたいな外見のメアリーであれば、まずエイベルは馬車に乗りこまず、もし乗りこんだとしても、話すら聞いてくれなかっただろう。

(きつと聖騎士に選ばれた連中は、清楚系美女がおびえていたら優しくしたくなるんだわ。アイツら、基本は正義感の強い紳士だもんね。それに、こんな美女なら女の私でも助けてあげたくなるし)

そんなことを考えながら、メアリーはおずおずとエイベルを見た。緑色の瞳がメアリーの次の言葉を静かに待っている。

「私は、お父様から聖女になるようにきつく言われて育ちました。聖女にならないと捨てられてしまいます……。ですから、パティ様に嫌がらせをしました。本当に申し訳なく思っています。ですが、パティ様の命を奪ってまで聖女になろうとは思っていません」

メアリーはそつと目を伏せた。

「……それに、お父様には見限られてしまいました。もう私は聖女なんてどうでもいいです。聖女になれなかった私が生きる意味はなんでしょうか? 今さら保身のための嘘はつきません……。それより、真犯人が捕まらずパティ様の身がまた危険に晒されないか心配です」

ここでホロリと涙でも流せたらいいのだが、そんな天才子役のような神業はできない。それでもエイベルはなにか思うところがあつたようで、それきり黙りこんでしまった。

(これ……大丈夫かな? 背中への傷も見せておいたほうが説得力あつたかな?)

そんなことを考えていると馬車が止まった。窓から外を見ると、聖女候補として足繁く通った荘厳な神殿の入り口が見える。

御者が馬車の扉を開くと、エイベルは馬車から降りていった。

(私、ここから生きて出られるのかな……。いや、もうやるしかない!)

覚悟を決めてメアリーも馬車から降りようとすると、エイベルが右手を差し出してきた。メアリーが驚いていると「いいから」とよくわからないことを言う。

(もしかして、エスコートしようとしてくれているの?)

恐る恐るエイベルの手に触れると、エイベルはメアリーの手を軽く握った。

「僕は、君のこと、ずっと勘違いしていたみたいだ」

気まずそうにそうつぶやいたエイベルを見て、メアリーは『コイツ、ちょろいな』と思つた。

エイベルにエスコートされながらメアリーが馬車から降りると、白馬から下りたルーフォスが怪訝けげんそうな顔でこちらを見ていた。

（そりやそうだわ。聖騎士が容疑者をエスコートしてどうするの）

でもこれは、エイベルがメアリーに同情した結果なのだろう。なぜなら、ゲーム『聖なる乙女の祈り』のエイベルは、メアリーと同じ庶子でも、まったく異なる待遇で育っていたからだ。

エイベルの父、フランティード侯爵は愛妻家で有名だが、夫人との間に子どもができなかった。

このままでは、侯爵家を親類に引き継がせなければならなくなる。それなのに夫人が「側室を置いてください」と何度お願いしても侯爵は夫人だけを愛し、首を縦にふらなかった。

追い詰められた夫人は、侯爵に媚薬を盛り、信頼できる女性と関係を持たせた。そうしてできた子どもがエイベルだ。エイベルは侯爵夫人の子どもとして、侯爵夫妻にとっても愛され大切に育てられた。

それなのに、同じ庶子のメアリーが、庶子であるというだけでひどい扱いを受けていたと知り、つい同情してしまったようだ。

（でも、エイベルって良くも悪くも自由で気まぐれキャラだから、あまり信用しないほうがいいかも……）

今はメアリーのことを可哀想に思っているけど、同じ聖騎士のルーフォスの話を聞いたら、またコロツと態度を変える可能性もある。

隣を歩くエイベルをチラリと見ると、エイベルはメアリーの手をじっと見ていた。

「ちよつと細すぎない？ 前はこんなじゃなかったよね？」

エイベルの言う通り、以前のメアリーは女性らしい柔らかな身体つきだった。メアリーはさらに同情を誘うために、そつと目を伏せた。

「……謹慎を受けてから、なにも食べさせてもらえなくて……。でも、それは仕方ありません」

消えそうな声でそう伝えると、ギリツとエイベルは歯を噛みしめた。そして、怒りのこもった瞳をルーフォスに向ける。

エイベルは、メアリーのことを気遣うような優しい声で話し出した。

「メアリー、君の罪はまだ確定したわけじゃない。パティだけはずつと君は犯人じゃないと言っているね。伯爵令嬢の君が、無実の罪で牢屋に入れられるのはひどすぎるとパティが言うから、温情で伯爵家での謹慎にとどまったのに……そんな扱いを受けていたなんて」

（パティ、私を助けようとしてくれたのね……。ありがとう）

パティには犯罪ギリギリの嫌がらせをしまくったのに、それでもメアリーをかばってくれるなんて。彼女こそ、真の聖女だと今ならわかる。

（でもまあ、エイベルさんよ。その話が本当なら、『パティだけは』ってことは、アンタはついさっきまで私が犯人だと決めつけてたってことだよな？ まあ、私の日頃の行いが悪かったのは事実だけど、とりあえず私に一回謝ったらどうなのよ）

思惑通りにエイベルの同情を買うことができたが、心は少しも喜べない。エイベルを殴りたい気持ちを必死に抑えていると、怒りで身体がカタカタと震えた。その震える肩にエイベルがそっと手を乗せる。

「大丈夫。僕がついてる」

（信用できるか——!!）

叫び出したい気持ちをこらえて、メアリーは「あ、ありがとうございます」となんとか返事をした。

メアリーは広い神殿の通路を、ルーフォスにはらみつけれ、エイベルには優しくエスコートされながら歩いた。誰も一言も話さない。荘厳な空間には、コツコツと三人の足音だけが響いている。メアリーは天井を見上げて軽いため息をついた。

（そもそもさあ、聖女を聖騎士の投票で選ぶっていう、この国のシステムが悪い）

この世界で聖女になるには、聖騎士たちにその力と人間性を認められる必要がある。ようするに、聖騎士たちから一番人気を集めた女性がこの国の聖女となるシステムだ。

だから、聖女になりたければ、どうしても聖騎士たちの顔色を窺わなければならない。（ゲームプレイ中は何とも思わなかったけど、なんて不公平なシステムなのよ。聖騎士っていつでも普通の男なんだから、そりゃ好みの女性に投票するでしょう）

ちなみに、聖女候補は二人、聖騎士は五人。それぞれ聖なる力が強い者順に選ばれる。聖女候補は、メアリーとパティ。聖騎士は、ノーヴァン伯爵家の令息ルーフォス、フランティード侯爵家の令息エイベル、あとの三人もゲーム『聖なる乙女の祈り』の攻略対象たちだ。そして悪女メアリーは、この五人の聖騎士全員から嫌われていた。

ゲームではどのルートでもメアリーが死ぬことから、聖騎士たちに嫌われているところか、隙あらば殺したいくらいに思われていると考えておいたほうが良さそうだ。

（あー、頭が痛くなってきた）

メアリーが額を押さえると、すぐにエイベルが「メアリー、大丈夫？」と声をかけてきた。その様子を見たルーフォスが冷ややかな視線を向ける。エイベルはルーフォスにらみつけた。

「なんだよ、ルーフォス」

「いや、見事にたぶらかされている、と思つてな」

ルーフォスは、エイベルではなくメアリーを見ていた。

「お前は昔からそういうのが得意だった」

意味ありげに鼻で笑われ、メアリーは首をかしげた。

（は？ 男をたぶらかすのが得意だったら、今、こんなことにはなっていないっつーの！）
しかし余計なことを言つてエイベルの同情を失うわけにはいかない。

メアリーはエイベルの腕に少しだけ身を寄せると、小さな声で「申し訳ありません。ルーフォス様」とだけつぶやいた。ここでは変に言い訳をするより、ルーフォスにおびえているふりをしてエイベルの想像に任せたほうが良さそうだ。

おびえる薄幸美女の効果は抜群で、エイベルはメアリーを守るようにルーフォスとの間に割つて入った。

「ルーフォス、お前いい加減にしろよ！ メアリーは妹だろ!? お前がそんなひどいやつだなんて思つてなかった!」

「はっ、妹……ね」

ルーフォスは鼻で笑うと、一人で先に歩き去った。取り残されたエイベルは拳を強く握りしめている。

「庶子は、妹じゃないっていうのかよ……」

メアリーはエイベルの後ろでこっそり『そうだよね、アイツひどいよね』と思ひながらうなずいた。

エイベルに優しくエスコートされながら、神殿の一室の扉の前にたどりつく。

（この扉の向こうに、私を殺す聖騎士どもが集まっているのね……）

ちなみにゲームでの断罪イベントの結末は、この時点で主人公パティへの好感度が一番高いキャラクターが誰かによって、二パターンに分かれる。一つ目は、悪女メアリーがヒステリックにわめき散らし、牢屋にぶちこまれるルート。そして二つ目は、悪女メアリーが逆上してパティに襲いかかり、その場で聖騎士に斬り殺されるルートだ。

（ちよつと待つて。よく考えたら、いくら愛する人を守るとはいえ、パティの前で人を殺す聖騎士ってなんなの？ 女が一人暴れたくらい、男が五人もいたら軽く取り押さえられるのに……そんなに私を殺したいの!?)

聖騎士の鬼畜っぷりに心底震えながらも、メアリーは生き残るためにゲームの記憶を必死に思い出す。

（えっと、私を斬り殺すルートのキャラクターは、騎士団長のカルヴァンと……エイベル）

隣で心配そうな顔をしているエイベルを見て、メアリーは心の中で『お前かあ!』と激しく突っこんだ。

（はあはあ、落ちつけ、私!　ここは殺されるルートが一つ減ったかもしれないと感謝するところよ!　よし、聖騎士になにを言われても、私は絶対に怒らない!　キレイない!　暴れない!）

覚悟を決めたメアリーは、泣きそうな顔でエイベルに向かってうなずいた。エイベルはそれにうなずき返し、扉を開く。

扉の向こうには、異母兄のルーフォスと、騎士団長のカルヴァン、そしてこのアニスヴィヤ王国の王子ハロルドの姿があった。ハロルドは王族にふさわしい豪華な椅子に座っていて、その左にカルヴァン、右にルーフォスが控えている。

（う、うそ、パティと魔導士クリフがいない）

心優しいパティと、平民出身にもかかわらず国一番の魔導士として名高いクリフ。彼らは、このゲームの良心といつていいほど慈悲深いキャラクターだった。

そしてクリフは、ゲームで唯一、メアリーを許して殺さなかった人物でもある。

（結局、クリフルートでも、悪女メアリーは修道院に送られる途中で盗賊に襲われて、殺されてしまうだけだね……）

『なんて悪女に厳しい世界なの?』と嘆かずにはいられない。

そんな二人がいないこの部屋は、まさにメアリーにとって針のむしろだ。

（どういうこと?　ゲームではパティと攻略対象たち全員がいるはずなのに。もしかして、私が前世の記憶を思い出したから、ストーリーが変わったとか?　……でもそれなら、うまくやれば生き残れるかもしれない）

震えながら部屋に入ると、エイベルが「ハロルド殿下。メアリー・ノーヴァン連れてきました」と報告する。そして、エイベルは『大丈夫だよ』とでも言うように、ぎゅっとメアリーの手を握った。

（や、やめて!?　この状況で優しくされたらすがりつきたくなるから!）

エイベルの手の温かさに泣けてくる。

ルーフォスからは忌々しげな舌打ちが聞こえ、ハロルド王子とカルヴァンはお互いに顔を見合わせていた。しばらくして、こちらに向き直ったハロルド王子が、紫水晶のように美しい瞳を優しく細める。

「ご苦労だったね、エイベル。それで、メアリーはどこにいるのかな?」

そう言いながら、ハロルドが柔らかなような自身の黒髪を耳にかけた。その仕草には製品が漂っている。エイベルはメアリーを見つめて「彼女がそうです」と答えた。

「へえ、女性には化粧や服装で変わると聞くけど、ここまで変わるものかな」

ハロルドがルーフォスに視線を送ると、ルーフォスが「間違いありません」と無表情で答えた。

「まあ、身内がそう言うなら、とりあえず信じることにしようか」

『身内』という言葉にルーフォスのこめかみが不快そうにピクリと動いたが、メアリー以外は気がつかなかったようだ。

ハロルドは「カルヴァン、説明を頼んだよ」と穏やかに伝えると、メアリーを見つめて優しい笑みを浮かべた。その途端、メアリーの背筋に冷たいものが走る。

（これは、腹黒王子の、マジギレ微笑……）

ゲームでのハロルドは優しそうな言動とは裏腹に、とんでもなく腹黒いキャラとして描かれていた。

（前世の記憶を思い出すまでそのことを知らなかったから、私、王子の票が欲しくて色仕掛けしようと近づいたことがあるのよね……）

もちろん、そんなものはまったく通用せず、さっきのような笑みを浮かべた王子に優しく追い返された。

（バカ、私のバカ！ 死にたいの!）

自分の黒歴史を悔やみながら、メアリーは目を閉じた。

書類を読み上げるカルヴァンの低い声が部屋に響く。内容は、聖女候補パティのお茶に毒が盛られていて、危うくパティが殺されるところだったというものだ。その犯人がメアリーだと証言している者がいるらしい。

カルヴァンは威圧するように「メアリー・ノーヴァン。申し開きはあるか？」と言い放った。

（私は……私は、絶対に、生き残ってやる!）

覚悟を決めてゆつくりと目を開き、メアリーはハロルドを静かに見つめた。

「私ではありません。私はやっておりません」

あくまで冷静に。かつ、どこか傍げに見えるようにメアリーはそつと目を伏せた。緊張と恐怖から、うっすらと涙がにじむ。

（ど、どう？ 涙を浮かべておびえる美女の効果は？）

ハロルドを見ると、相変わらず微笑を浮かべながらメアリーを見つめていた。

（ううっ、自分の美しい顔を見慣れている美形王子は、おびえる美女くらいでは心を動かされないか！ どうすれば……）

ここは、エイベルの時のように、可哀想な子アピールをしたいところだ。

（なんとかそつちに話を持っていけないかしら？）

メアリーはうつむきながら「しょ、証人とは、どなたなのでしょうか？」と震える声で聞いてみた。ちなみに、震えているのは演技ではない。部屋に入った時からずつと震えが止まらないのだ。エイベルが左手を握ってくれていなければ、恐怖で立っていられなかったかもしれない。それくらい、この部屋はメアリーの死に直結している。

カルヴァンがハロルドに視線を向けると、ハロルドは笑顔のままうなずいた。それを見たカルヴァンの「証人をここへ」という言葉で扉が開かれ、一人のメイドが入ってきた。そのメイドの姿にメアリーは目を見開く。

（証人って、伯爵家からついてきた、私付きのメイドじゃない！）

正確には、伯爵夫人がメアリーに嫌がらせをするために無理やりあてがったメイドだ。そのせいで、聖女候補として神殿で過ごす間もネチネチと彼女から嫌がらせを受けていた。

メイドは清楚な姿になったメアリーを見て一瞬驚いた表情をしたものの、すぐに涙を浮かべて聖騎士たちに訴えかけた。

「私、メアリーお嬢様に脅されたんです……パティ様のお茶に毒を入れなければひどい目に遭わせるって……！」

（アンタ、なに言ってるの？ 私を犯人にでっちあげて、ノーヴァン伯爵家を潰すつもり!?）

そこでメアリーは、ハッと気がついた。

（ああ、そっか。伯爵がメイドと浮気してできた子の私だけじゃなく、自分を裏切った夫もろとも、ノーヴァン家を潰そうってのが伯爵夫人の魂胆なのね）

たとえば伯爵家が潰れたところで、聖騎士に選ばれた息子ルーフォスが罪に問われることはないし、伯爵夫人は、伯爵と離婚して裕福な実家に帰ればいいだけだ。

（なるほど。私は今、伯爵夫人の差し金で無実の罪を着せられて殺されそうになっているのね？ 伯爵家なんてどうなってもいいけど、私が生き残るためにやることは一つ！ 今から、この嘘つきメイドと証言媚び売りバトルよ！）

「証言」とは、ある事柄の証明となるように、体験した事実を話すこと。「媚びを売る」とは、相手の機嫌を取るために気に入られようとすること。

（ようするに、これから私は、聖騎士に気に入られるような態度を取りつつ、『自分はいパティのお茶に毒を盛っていません』とアピールしないといけないのね。それができなかつたら、この嘘つきメイドのせいで、ここで私は殺されてしまうってことだわ）

嘘つきメイドの演技力は天才子役並みらしく、目にうつすらと涙を浮かべている。

(このメイド、嘘泣きがこんなに自然にできるなんて……。やるわね)

感心している場合ではないが、腹黒ハロルド王子の許可なく話すのが怖すぎて、メアリーは黙ってメイドの証言を聞いていた。

「メアリーお嬢様は、普段から気性が荒く、私はいつも手を上げられていました。この前も、神殿での食事中にお皿を投げつけられて……」

そう言いながら、メイドは服の袖をめくる。そこには青いアザがあった。

(それは、アンタが私の食事に虫を混ぜたから、私がブチギレたんでしょうが！ 毎回、地味な嫌がらせしてきて、そりゃ皿も投げつけるわよ！)

ハロルドは、笑顔のまま「うんうん」とうなずくと、メアリーに視線を向けた。

「メアリーは、なにか言いたいことはあるかな？」

王子の優しい紫色の瞳が怖い。だが、このチャンスを逃すわけにはいかない。メアリーは、嘘泣きはできないので悲しそうにそっと目を伏せた。

「あの時は、お皿の中に虫が入っていたので、驚いてお皿を投げてしまったんです。当てるつもりはなくて……ごめんなさい。……あの、神殿の食事にはよく虫が入っていますよね？」

最後の言葉は、隣にいるエイベルにわざと不思議そうに聞いてみた。

(フッフッフ。ここは、ただ事実を突きつけてメイドを責めるより、このメイドになにをされてきたか、他の人に察してもらったほうが同情を引きやすくなるはず)

予想通りエイベルは、緑色の瞳をスッと細めてメイドを見た。

「そんなこと、今まで聞いたことがないけど？ メアリーに食事を出す前に、お前は気がつかなかったのか？」

エイベルにらみつけられて、メイドはビクッと身体を震わせた。だがすぐに涙を浮かべて「そんなはずありません！ お嬢様が嘘をついているんです！」と言い返してきた。

「お嬢様は私に怒鳴ってばかりで、パティ様のことも『殺してやりたい』といつもおっしゃっていました！」

(確かに以前の私は怒鳴ってばかりだったし、パティのことは殺してやりたかったけど、今は違うから。あと、そんなにキャンキャンほえると、その腹黒王子に消されるわよ)

ああいうタイプは、ヒステリックな女には厳しいものだ。

(でも、この流れなら、私も自然に可哀想な子アピールができるわ)

メアリーはエイベルに頭を下げると、握られていた手を放してもらった。

「ハロルド殿下。お見苦しいものをお見せしますが……」

ワンピースのボタンを外すと、メアリーは後ろを向いて胸元を押さえながら、ワンピースを肩まで下ろした。アザと傷だらけの背中が見えたのか、隣でエイベルが息を呑む。

静まり返った部屋の中で、メアリーはか細い声でつぶやいた。

「暴力をふるわれているのは私です。そのメイドは嘘をついています」

メアリーが言い終えると、エイベルは慌ててワンピースを上げて背中を隠した。彼のが可愛らしい顔が今にも泣きそうに歪んでいる。そつと腹黒王子の様子を窺うと、優しげな笑顔は消え、少し驚いたように目を見開いていた。

（効果はあったようね）

嘘つきメイドのほうは、頬を引きつらせている。

（評判の悪い悪女の私なら、簡単に罪をかぶせられると思っていたでしょう？　以前の私はすぐにキレて暴れていたもんね。人に弱みを見せて命乞いするような女じゃなかったもの。ふふ、まだまだ、攻めるわよ）

「……私がパティ様に嫌がらせをしたのは事実です。そのことについてはどのような罰でもお受けします。ですが、この事件は別です！　このまま真犯人が捕まらなけれ

ば、またパティ様が危険な目に遭ってしまいます。それだけは避けたいのです」

メアリーは乙女が祈るように胸の前で両手を合わせる。チラッとメイドを見ると、怒りで顔を赤くしていた。

「皆様のお話を聞く限り、この事件は殺害未遂で、パティ様は生きていらつしやるのですよね？　毒を飲まれてしまったパティ様はご無事ですか？」

この質問には騎士団長のカルヴァンが答えた。

「パティ嬢は毒が入ったお茶に口をつけていない」

メアリーはホッと胸をなでおろす。メアリーと同じく聖なる力の強いパティは毒程度では死なないと、ゲームの知識で知っていた。けれど、まったく効かないわけではない。今彼女がこの場にいないのは、毒を飲んでしまって苦しんでいるからかもしれないと、少し心配していたのだ。

（ただこれだけ騒ぎたてるってことは、聖女候補が毒くらいでは死なないって、皆、知らないようね）

「良かったです……。でも、カルヴァン様。それならどうして毒入りだとわかったのですか？」

「その場にいたクリフが気づいたのだ。パティと二人でのお茶会だったらしい」

「そうでしたか」

天才魔導士クリフなら、毒入りのお茶を瞬時に見分けるくらい簡単なことなのだろう。メアリーは困ったような顔を作り、嘘つきメイドを見つめた。

「それでは、どうして私の参加していないパティ様とクリフ様のお茶会に、私付きのメイドであるあなたが居合わせたのですか？ 私に脅迫されたと言いますが、もしそれが嘘なら毒入りのお茶をパティ様に飲ませようとしたのは、あなた自身ということになりますよね？」

メイドの顔が青ざめた。ようやく、自分が犯人だと疑われていることに気がついたようだ。カタカタと震え出したメイドを見て、ハロルド王子は優しく微笑んだ。

「うん、話はよくわかった。メアリーよりこのメイドに詳しい話を聞いたほうが良さそうだね」

エイベルが「僕に取り調べをさせてください！」と語気を荒くする。

「任せたま。エイベル」

エイベルは小声でメアリーに「頑張ったね」とささやいた後、メイドを連行していった。メイドはメアリーを指さしながら、「違います！ あの女が！ あの女が悪いんです！」と部屋を出る最後の最後まで叫んでいた。

（なんとか、生き延びた……？ それにしても、こんなこと、調べればすぐに私が犯人じゃないってわかりそうなものに……）

椅子から立ち上がったハロルド王子は、笑顔のままメアリーのそばに來た。そして、顔を寄せメアリーの耳元で優しくささやいた。

「メアリー、君を殺せなくて残念だよ」

一瞬、なにを言われたのかわからず、ハロルドの顔を見ると、ハロルドは器用にパチンとウィンクした。

（この腹黒王子……私が無実だとわかっていたのに、私を消したくてメイドの嘘を利用したってこと？）

初めから、メアリーが毒を入れたかなどはどうでも良かったとでも言うかのような態度だ。

実際、もしここで、いつものようにメアリーが叫んで暴れていたなら、メアリーは確実に殺されていた。

ハロルドは何事もなかったように「カルヴァン、メアリーをしばらく護衛してくれ」と微笑んだ。

「はい」